

生き生きと活動するためには？

中堅期保健師研究会で活発討議

在職5年以降の保健師を対象とした「地域看護研究会」が12月23日（月）、熊本市中央区の県庁地下大会議室であり、講演やグループディスカッションを通じ、中堅保健師がいきいきと活動するための方策などを探りました。

本学の地域貢献事業の一環として毎年開催。今回は、県との共催で中堅期保健師研修会を兼ねて開催され、県内自治体や保健所などで活動する64人が参加しました。県医療政策課の笠新課長、本学の竹屋元裕学長のあいさつで開会。九州大学大学院の鳩野洋子教授が「中堅期の保健師が生き生きと活動するために」と題して講演しました。

鳩野教授は、「中堅期」を新任期と管理期のはざまにあるキャリアの過渡期と定義。仕事においては脂がのってくる一方で、子育て、親の介護といったプライベートな部分での葛藤が生じる時期でもあると説明しました。こうした中、仕事に関連したポジティブで充実した心理状態、いわゆるワークエンゲージメントの大切さを強調。自己を振り返り（自己省察）、新しい取り組みに主体的にかかわったり、いつもと違う場所に身を置いたりするなど、自己研鑽の方法を紹介しました。さらに、「中堅期にある保健師がワークエンゲージメントしていると、その高い動機付けや熱意が、周りに影響を与えることになる」と締めくくりました。

引き続き、参加者は6人程度の班に分かれ、「中堅期の保健師がいきいきと活動、そして働き続けるためには？」をテーマにグループディスカッション。それぞれが職場で抱える課題や取り組み等について活発な意見交換をしていました。（NL編集部）

写真上は、講演する鳩野教授。同下は、グループになり、保健師としての悩みや課題などについて討議する参加者たち



キャンパステラス発

松岡 詠子

学びの効率

いまだ残暑厳しい昨年10月のある日の午後、キャンパステラスから熱気あふれる6、7人の学生たちの会話が聞こえてきた。

「どう覚えてたのかわからない。いつも、間違ってしまう」と一人の女子学生。すると、教える側に回った男子学生が「この波形は間違えやすいから、この部分を注意して!」「ポイントはこれ」。近づいてみると、何重もの丸で印をつけながら、思いつく限りの表現で説明をしている。しばらくして、「やっと理解できた!」と、安堵の声が聞こえてきた。

グループ内で交代しながら得意分野の内容を教え合う学生たち。教える側は相手に伝えることで自分が何をどう理解しているのか整理し、聞く側は自分の理解が不足している部分を確認しながら他者の学びを取り入れていく。双方が持っている経験を出し合うことで、知識の相互交換が生まれていくわけだ。

互いに教えあうことで、学修の効率は高くなっていくのかもしれない。学びに向かう学生たちの真摯な姿勢が伝わってくる一コマだった。

専門を異にする研究者や市民が集まり、水俣病を問い続けている水俣病研究会は来月、1970年に上梓した『水俣病にたいする企業の責任—チッソの不法行為』の＜増補・新装版＞を刊行します。刊行を前に研究会メンバーの向井良人准教授（共通教育センター）に寄稿してもらいました。



水俣病研究会と私 国

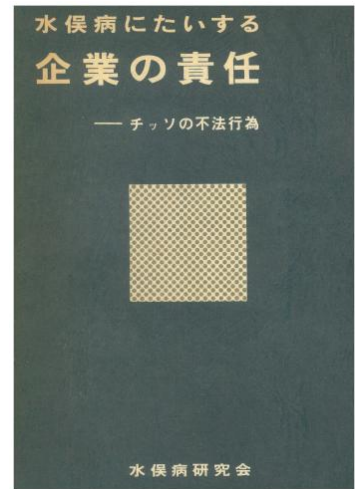
共通教育センター准教授
向井 良人

激論の末生まれた『企業の責任』

水俣病患者家庭互助会のうち訴訟派29世帯が1969年6月に損害賠償請求訴訟を熊本地裁に提訴したとき、判例に照らせば原告敗訴は確実というのが法学者に共通の見立てであった。被告チッソ(株)水俣工場の排水からメチル水銀中毒が発生することを会社は予見できず、したがって過失責任を問えないという理屈である。原告勝訴のためには新しい法理論が必要であった。そこで水俣の「水俣病市民会議」と熊本の「水俣病を告発する会」の働きかけで、裁判を理論面から支援する「水俣病研究会」が同年9月に発足した。筆者が2歳になった翌月のことである。

水俣病研究会には、法学者、社会学者、医学者、チッソ労働者(争議による分裂を経て第一組合は患者支援を宣言した)など、様々な人々が参集した。裁判は進行中で、猶予はなかった。水俣病研究会は激論を重ね、発足から1年足らずの間に「安全確保義務」を柱とする385ページの報告書を刊行する。『水俣病にたいする企業の責任—チッソの不法行為』(水俣病研究会, 1970, 水俣病を告発する会発行)=写真=である。もちろん、3歳の筆者がそれを知るはずはない。筆者は20歳の秋に熊本大学文学部の「社

会調査実習Ⅰ」で初めて水俣を訪ねた。指導教員の丸山定巳先生は水俣病研究会メンバーであり、『水俣病にたいする企業の責任』の分担執筆者でもある。教員室の書架を埋める資料は1969年以来収集されたものであり、ゼミの後でコーヒーを飲んでいた社会学研究室は水俣病研究会の会合の場でもあった。筆者はモラトリアム延長で4年生を2回過ごして卒業した後、6年の会社勤めを経て熊本大学の修士課程に入った。筆者は30歳になろうとしていた。



収蔵本、文献 どこからでも探せます！ Web選書会も開催中

本学の蔵書は約8万2千冊。このうちほとんどが医療系専門書です。ある日、「専門書はどこにありますか」という学生からの問い合わせがありました。文献検索演習やガイダンスで探し方を説明し、体験済みのはずですが、いざ必要な時には忘れているのでしょう。

そこで、入り口に近い弓型書架に医学・医療・看護・リハビリの新作図書を置きました。(これまでは人気の小説やレポートの書き方などの医療系以外の図書を置いていました。)そして、館内設置PCのトップ画面に「文献検索方法」と「スマホでも検索できる」ことを表示し、どこからでも図書館の本を探せることを案内しました。

ネット上には、さまざまな情報があふれており、信頼できるものを自分で見極めるのは、初学者には困難です。図書館蔵書や図書館が契約しているデータベースを使って、文献を探しましょう。電子ブックや電子ジャーナルも利用で

きます。図書館を使いこなして、学修や研究に役立ててください。

また、Web選書会を開催中です。学修・研究はもとより、就活や留学、その他興味のある図書や雑誌、映像資料などリクエストできます。参加方法は、掲示板等でお知らせ済みです。どうぞご参加ください。(図書館)



図書館だより



新着の専門書が並べられた入り口近
くの弓型書架

韓国語学習通し 新たな交流築いた

「話してみよう韓国語」熊本大会が12月14日（土）、50周年記念館で開催され、熊本県内外から集まった参加者が、韓国語を通じて交流しました。

「話してみよう韓国語」大会は、韓国語学習を楽しむ機会を提供し、韓国文化への理解を深めるとともに、日韓交流の発展に寄与することを目的としています。「歌ってみようKPOP」とともに毎年、東京、大阪、鹿児島、熊本など全国10カ所で開催。韓国語を学ぶ喜びや韓国文化への関心を深める場となっています。過去の大会では、本学の韓国文化研究クラブやダンスチーム mimic が優秀賞や最優秀賞を受賞するなど、高いレベルのパフォーマンスを披露しています。

15回目を迎えた今回熊本大会は「話してみよう韓国語」大会のみの開催となりましたが、熊本県内だけでなく、福岡県や佐賀県、さらには遠く対馬からも参加がありました。また、リハビリテーション学科理学療法学専攻の申敏哲教授が実行委員長を務め、本学の学生ボランティアや教職員が裏方として大会を支えました。

大会は、3つの部門（中高生スキット部門、一般スキット部門、スピーチ部門）で行われ、合計28

チーム42人（中高生13チーム22人、大学・一般15チーム20人）が練習の成果を存分に発揮しながら競い合いました。中高生スキット部門では、対馬高校の2人が最優秀賞を受賞し、「話してみよう韓国語」高校生全国大会への出場権を獲得しました。

申教授は、「多くの人たちの支援のおかげで、無事に大会を開催することができました。参加者の皆さんが韓国語学習の楽しさを再確認し、新たな交流を築いていただけたと思います」と述べました。次回2025年度の熊本大会は熊本学園大学で開催される予定です。（NL編集部）



交流を深めた「話してみよう韓国語」熊本大会の参加者たち

公衆衛生看護学専攻科は一般選抜 認定看護師教育課程など入試

認定看護師教育課程（脳卒中看護分野、認知症看護分野）、特定行為研修課程、公衆衛生看護学専攻科一般選抜を11日（土）、実施しました。

年明け最初の入試となります。各課程、専攻科とも開設している大学が少ないことから、北海道

をはじめ、遠方からの出願もありました。冬本番の寒さとなりましたが、滞りなく終了しました。

合格者は、いずれの入試区分も21日（火）に発表されます。

（入試・広報課）

インフォメーション

週間行事予定（1月21日～27日）

1/21（火）	学部長表彰 表彰式
1/23（木）～30（木）	後期定期試験